

研修会から

## 『建設業の担い手確保に向けて（若者を知る）』

宮川安江

担い手の確保・育成が最優先課題となっている建設業界の実態と課題を労働調査会発行の「建設労務安全」にシリーズで掲載しました。「若者を知る」「若者を採用する」「若者を定着・育成させる」のテーマを3回に分けて掲載しました。1回目は「若者を知る」のテーマでした。その概要を紹介します。

建設業における就業者数は1997年の685万人をピークに減少し、2010年には498万人に減少、その後ほぼ横ばいで推移している。特に技能労働者は455万人から100万人以上に減少している。

また、建設業の就労者年齢は、55歳以上が33.8%を占め29歳以下は10.8%となっており、若年層と高齢者の開きが顕著になってきており、技術・技能の継承に大きな課題となっている。

内閣府が実施した「平成25年度の若者の意識調査」によると、「収入、労働時間、職場の雰囲気、仕事の内容」は高く、一方で、「仕事の社会的意義、事業や雇用の安定性、将来性」は低く、会社という組織の将来性でなく、個人として如何に職業生活を送るかを重視していることがうかがわれる。

では、今若者がどんな仕事観を抱いているか、建設技術について学んでいる工業高校生、専門学校生、大学生の仕事観を聞いてみた。

○埼玉県立熊谷工業高等学校進路指導の先生は、今の生徒は「おとなしい」、「皆の前では質問が出来ない」、いざ実習に入ると「分からないと作業が止まってしまう」というのが現状です。失敗を非常にいやが

ります。コミュニケーションについては、「自分の意見を相手に上手く伝えられない生徒が増えています」と言っておられました。

県内の110社の協力のもと1年生全員が4日間のインターシップを経験しますが、安全上の理由で実作業は出来ませんが、掃除、現場パトロール、足場上の移動、仮設エレベーター乗車体験などさせ、働くという実感が湧くようにしています。

就職先は、ほとんど学校に送られる求人票から受験します。最近では求人票に載っている「過去数年間の離職状況」に注目する生徒が多いようで、実家から通勤できる地元志向、先輩がいる、給料、休日などが選定理由に挙げています。

進路指導の先生は、即戦力が欲しい気持ちは分かりますが、長い目で見ていただけると幸いですと言っておられました。

生徒の殆どが求人票から受験先を探しており、その求人票も平成28年度は2200枚以上、企業が学校訪問の数も500社以上におよび、就職希望者の90%は最初の1社目の会社見学で受験しております。

○専門学校である中央工学校の就職指導課の先生は、建設業界は、「技術は盗んで覚える」という習慣が色濃く残る業界です。学校で丁寧な指導を受けてきた学生とそれを受け入れる企業との間に大きなギャップが生まれてしまっています。最近になって、社内教育・研修制度を充実させたり、技術面だけでなく、心理的な部分でのフォローを充実する企業が増えてきました。企業からは「成績は問わないが挨拶がキッチンの出来る人を採用したい」という話をよく聞き

ます。一つの特徴として、地元志向が強く、転勤のある会社は避ける傾向にあり、自分の存在感を出せる規模の会社というのが一つのポイントとなります。

求人票は賃金だけでなく、残業や休日休暇について、企業によってだいぶ異なりますので、会社訪問・会社説明の際に必ず中身を確認するように指導しています。求人票には各種条件を明記するのは当然として、「会社の特徴を PR して欲しい。安心して生徒を送り出すことができるポイントの一つです」と言っておられました。

○ものづくり大学は、理論と技術を融合した革新的なカリキュラムと徹底した少人数実践教育の大学です。

この大学の学生の殆どがゼネコン、専門工事業、ハウスメーカー、設計事務所に就職しており、殆どの学生が施工管理技師としての就職を希望しています。勤務地や転勤を気にしない学生が大半で、「地図に残る仕事がしたい」「より大きな建物を造りたい」とやりがいを求めて、やはり大手企業は魅力的なのでしょう。2年次には40日間のインターンシップを実施しており、仕事のイメージが明確になり、進路の方向性が見えてくる。

最近「教育体制が充実している」と志望企業を決める学生もいます。求人票には教育体制について、「どんな教育・研修制度があるか明記して欲しい」と言っています。単独では研修の実施が難しい中小企業であっても、建設業協会などが中心となり、複数の企業が集まって研修をするケースもあるのでぜひ PR して欲しいとのこと。

最近の若者の特性として「自主性がない」と言われますが、率先して行動できる学生もいますが、言われるまで全く動けない学生もいます。言えばやるんですよ、指示を出す側がどれだけ目を配ってあげているかで、成長の伸びが大きく変わります。注意して欲しいのは「怒り方」です。最近の若い子は怒られた経験が無いので、頭ごなし

に怒ると逃げ出しかねません。良いところを褒めてから怒るなど、個性を認めた上で、ワンクッションを図って貰えると長く付き合っていけるのではないかと思います。

最近の学生は、親や学校、社会がすべてお膳立てした上で育ってきました。自ら考えて働くのが苦手なのですが、長い目で見守って欲しいと先生は言っておられます。

#### 若者を受け入れる条件

仕事へのやりがい・満足度のアンケート調査で、仕事のやりがいは9割、仕事の内容は8割が肯定的です。多くの人がスケールの大きいものづくりの醍醐味に満足し、その責任的立場を担っていることに誇りを持っています。賃金に関しては平均年齢44歳、経験年数20.6年、18%が基幹技能者で、月給換算で平均36.2万円ですが、賃金構造基本統計調査(2015年)によれば、38.1万円(勤続年数12.1年)となるので調査したアンケートが低いことになるが、法定福利費等の経費の関係の可能性がります。

つぎに「自分の子どもに技能者として勧めたいか」の間に89%がNOでした。この結果をみるに、これからの若者が建設業に入ってこない最大の理由として、仕事がきつい、賃金が低い、休みがない、将来が不安という結果でした。

要約すると、「やりがいのある仕事であるが、賃金は安く、責任のある仕事であるから休みは取れない、正社員でないことも多いから仕事量が減れば仕事が出来なくなる恐れがあり、体力の衰えと共に収入が減り、けがや病気になれば働けなくなるなどの不安を常に抱き続けている。こんな心配は子どもにさせたくない」というのが本音です。

ではどうすればよいか。健康、失業等将来の不安を払拭するためにあるのが社会保障制度です。ハローワークや学校に求人票を出すには会社として社会保険に加入し、就業規則を整えて雇用条件を明確化する必要があります。

次ぎに離職の防止ですが、厚生労働省の調査によれば、建設業に就職した高校の新卒者は3年以内に半数が辞めてしまいます。その理由として「毎日現場に直行直帰、現場では見て覚えろと言われて教えて貰えず、逆に先輩や親方に怒られてばかりで、休みが少ないからデートも出来ず、たまの休日は疲れて寝ているだけで終わり、愚痴をこぼす同期の仲間もおらず、先輩や親方の羽振りを見れば将来の希望も持てない」というのが実態と考えて良いでしょう。

これを解決するには、例えば、技能や知識を教え育てるシステム、能力を適正に評価するシステムが必要と言うことです。これらは、一朝一夕に解決できる問題ではないが、建設産業の担い手確保・育成コンソーシアム（事務局；建設業振興基金）などが検討を進めており、まず同期の仲間をつくってあげる、同業者や地域の建設業者が集まって、一緒に採用し入社セレモニーを一緒にする、出来ることなら新入社員の初

期教育を一緒にやれば横の繋がりが出来ます。さらに研修などの仕組みにより定期的に直接顔を合わせる機会をつくること、さらにその会社と返りが合わない場合には他社に移れる仕組み、何年か先にはフリーエージェント宣言をして好きな会社に移れる仕組みを作れば、離職を大幅に減らすことが出来るのではないのでしょうか。

天候や現場の状況、景気変動などに左右されるという建設業独特の問題があります。まずは、業界内で結束を固め、業界全体の問題として処遇に取り組む必要があり、そして固定観念にとらわれず、例えば職人見習いで入職した人が職長を経て監督になり、最後には企業の経営者、訓練校の校長、建設団体の幹部になれるような、大学の教授や建築家、公共発注者の幹部等のキャリアパスとそれを実現するためのスキームづくりに取り組むことです。

(つづく)

## 『職場の香害』

セクハラ、パワハラ、マタハラなどのいじめや嫌がらせが職場で問題になっていますが、最近「スメハラ」（スメールハラスメント＝臭気ストレス）が話題になっています。

「同僚の服の香りで体調が悪くなった。上司に訴えたが個人の問題として取り合ってくれず退職せざるをえなかった」女性からこんな相談が日本消費者連盟が開いた「香害 110番」に寄せられたそうです。

強い香料のせいで迷惑を被ったり、体調不良を起こしたり。最近こうしたことが「香害」と呼ばれ注目されており、国民生活センターにも「洗濯物の香りで頭痛や吐き気がする」など、体調不良を訴える「危害相談」が増えているそうです。

国民生活センターの実験によると、強い香りの柔軟剤で洗濯した衣類などを室内で干すと、微香性のものや香料を使わなかった場合に比べてシックハウス症候群の原因とされる物質を含む「総揮発性有機化合物」（TVOC）の空気中の値が3.5～7倍になったと言います。微量の化学物質で頭痛や吐き気などが起きる「科学物質過敏症」という症状もあり、専門家は「同じ香りでも人や体調により症状が出るかどうか違う。香害が増えた背景には香り付きの商品が増え経験したことがない香りをストレスに感じる人も入るのでは」とみています。